書式８

成 果 報 告 書

助成番号	２２－Ａ０１

記入日　2024 年　4　月　19　日

フリガナ（　アサクラキミカ　） 氏　名　朝倉希実加	渡航先国名・地域 大韓民国・ソウル	所属機関 一橋大学大学院社会学研究科

研究テーマ：　植民地朝鮮･元山における女性運動の展開―槿友会を中心に―

研究期間　：　2023　年　2　月 ～　2024　年　1　月（　1 年　ヶ月）

研究成果（概要）

新聞資料などを中心とした当時の一次資料を元に槿友会元山支会の活動や所属会員について明らかにした。特に槿友会元山支会の中心人物であった金英淳に注目し、彼女の槿友会以前などの活動についても調べることによって元山支会の特徴を見出そうとした。元山では元山ゼネストが起こったように「労働問題」が一つの特徴であったと考えられる。

研究成果（詳細）

槿友会の機関雑誌として発行された『槿友』によると、元山支会の会員状況やその階層、事業については以下の通り述べられている。

名称	元山支会
所在地	元山府四洞三一
承認年月日	1928 年 10 月 10 日
設立年月日	1928 年 12 月 30 日
総数	44 名
知識程度	自中等至小学
年齢別	自 18 才至 40 才
家庭	25 名
労働	
農民	
学生	4 名
職業	15 名
無職	
部署	調研部〈調査研究部〉・財政部・政文部〈政治文化部〉・組宣部〈組織宣伝部〉
重要幹部氏名	金英淳・李誠訥・高如天・李貞徽・睦貞順・姜南粉
事業	一、元山労働争議団各細胞団体慰問　二、現在検束中にある会員の家庭訪問をすること
備考	

「槿友会会況一覧」『槿友』第 1 巻第 1 号（槿友会、1929 年 5 月）82-93 頁より作成、＜＞は筆者による

この表によると、1929 年 5 月時点での会員数は 44 名であり中等程度の教育を受けたことのある女性たちが会員であったことがわかる。またその職業は家庭女性が最も多く、職業女性、学生と続き当時の状況を踏まえれば職業女性が多かったことが特徴であると考えられる。また元山労働争議に関する事業について書かれており、他の支会の事業欄には労働争議に関する記述が見られなかったため一つの特徴的な事業であったと考えられ、実際に家庭訪問を行ったことが新聞記事においても確認された。

1910 年代から 1930 年代の『東亜日報』『朝鮮日報』を中心とする新聞資料を分析した結果、槿友会元山支会の会員であった女性たちの氏名が確認された。新聞記事において確認された氏名と槿友会における役職は以下の通りである。

氏名	役職	備考
金英淳	支会規約起草委員、支会設置準備委員、執行委員、執行委員長、大会議案作成委員、臨時総会臨時執行議長、第 1 回定期総会臨時議長、全国大会元山代表候補	
蔡啓福	支会規約起草委員、執行委員、執行委員長	
趙孝根	支会規約起草委員、検査委員候補、執行委員	
李貞徽	執行委員、政治文化部責任委員	
李亜	支会設置準備委員	
金順貞	執行委員	
姜御粉	執行委員、庶務部責任委員	
高如天	執行委員、財政部責任委員、大会準備委員	
李誠訥	執行委員、調査研究部責任委員、大会議案作成委員	
睦貞淳	執行委員、組織宣伝部責任委員、大会議案作成委員、全国大会元山代表	
李仁承	執行委員	
李鳳興	執行委員	
朴英心	執行委員	
朱春子	執行委員	
金英順	執行委員	
廉順愛	執行委員	途中入会
廉鍾愛	大会準備委員、執行委員	
申在坤	執行委員候補	
崔栄斗	執行委員候補	
方昇玉	執行委員候補	
崔敬淑	執行委員候補	
裴明進	検査委員	
趙和壁	検査委員	
廉仁愛	検査委員	
趙明淑	検査委員候補	
李活	大会準備委員	途中入会
尹順福		途中入会
金順貞		途中除名
方昇玉		途中除名

会員中うち支会の準備段階から参加し、執行委員長を務めたことのある金英淳に関する新聞資料などを詳しく調べた。その結果、金英淳は 1925 年から槿友会において活動する以前に元山労働青年会、元山青年連合会、元山女性青年同盟などの団体において活動を行っていたことが確認された。その後元山女子青年会で幹部を務め、国際婦人デーの記念式においては警察の介入によって解散させられた後に金英淳の自宅で開催したりと徐々に女性運動への参加が増加していく様子が確認された。槿友会元山支会の設立においても大きな役割を果たし、1928 年 7 月 9 日に行われた発起大会では司会を務めており、そこでは司会設置準備委員にも選ばれている。1929 年には槿友会全国大会において中央執行委員にも選ばれていることがわかる。

金英淳の写真

（『朝鮮日報』1930 年 11 月２日付より）

また元山支会を含めた咸鏡南道の支会で連合会が設置された際には元山支会の代議員として出席し、連合会の執行委員会に選出されている。このように元山支会だけではなく全国的な活動も行っていた金英淳であったが、1930 年に入ると社会団体に対する警察の弾圧が強まり、その中で金英淳も 1930 年 7 月 6 日に検挙され、8 月 9 日に咸興地方法院元山検事局に送致された。このソウル共産青年事件に関わったとして金英淳以外にも元山をはじめとする各地で 100 名以上が逮捕されているが、この時金英淳は結局釈放されている。しかし、再び他の事件によって 1931 年に検挙されており、その際警察署において拷問を受けたことが報道されている。金英淳は前者の事件で執行猶予 3 年、懲役 6 ヶ月の有罪判決を受け、後者の事件で 2 年の判決を受けた。その後景気を満了して 1934 年に出監しているがその後は活動などにはあまり関わらなかったようである。

槿友会元山支会の活動状況に関しては、1928 年 12 月 30 日に創立大会が行われており、この時に部署とその責任委員が決定しているが、庶務部、組織宣伝部、調査研究部、財政部、政治文化部の部署に話分かれて活動を行っていたようである。また 1929 年には定期大会の開催についても議論がなされており、1930 年に開かれた臨時大会の議案を見てみると、編物及び手芸講習の件・迷信打破の件・強制婚姻防止の件・婦人夜学の件・会員教養の件・公娼制廃止の件・婦人経済問題の件（「元山槿友大会」『朝鮮日報』1930 年 4 月 17 日付より一部抜粋）などの事項について議論されたことがわかる。議案を見てみると婦人夜学や迷信打破によって女性に対する教育を行い、また編み物手芸講習などによって女性が生計を立てられるように活動を行ったことがわかる。またこの他にも女学校における活動や元山罷業において慰問訪問を行っていることも確認され、教育問題から労働問題まで幅広い活動を行っていたことが確認された。

「元山盟罷写真/槿友会員の慰問訪問」（『朝鮮日報』1929 年 2 月６日付より）

留学中の生活・研究でのトピックス

留学においては国立中央図書館において資料調査を行ったほか、朝鮮近代史に関連する場所にフィールドワークを実施した。ソウル市内にある公平都市遺跡展示館には実際に槿友会の本部があった場所が現在も残されている。そこでは映像によって槿友会の紹介を行っていた。実際に本部があった場所に立ってみることによって当時の人々の想いに馳せることができた。また実際にその場所に行ったことによって槿友会本部と妓生組合が非常に近い位置にあることが確認できた。槿友会では公娼制度の廃止についても議論がなされているため、そうしたことが組合の近くに本部を置いたことに繋がる可能性についても考えられることがわかった。

公平都市遺跡展示館内の槿友会本部跡地

西大門刑務所において独立運動について学ぶことができたが、その際に刑務所に収監された一人一人の顔がわかる形での展示が行われており、研究においてもこうした一人一人の人生がそこにあったことを大事にして研究していきたいと考えさせられた。また西大門刑務所の前には柳寛順の銅像があり、また柳寛順が通った梨花女子学校の敷地内にも銅像があり他にもソウル市内に女性義兵の銅像があるなど歴史をジェンダー的な観点から再び考える動きが韓国内においても近年高まっているのではないかと感じた。また、こうした女性だけではなく独立運動に関わった運動家たちの銅像や博物館が地域ごとに存在することを確認し、韓国内において民族解放に取り組んだ独立運動というものがどれだけ重要であるのかを考えさせられ、それを日本において日本人である自分が研究することの意義や慎重に行わなければいけないのではないかと思った。他にも近代史に関わる場所だけではんなく現代のフェミニズムに関わる場所やデモに参加しながら近代と現代のつながりについても考えられた。

今後の社会貢献

韓国で実際に生活し、韓国人と話をすることによって得た知識や情報について社会に発信していけるようにしていきたいと考えている。現在に至るまで日韓関係は本当の意味で改善していないと考えおり、その解決のためには歴史に日本社会が真摯に向き合うことが求められていると思う。しかし現在の日本社会においては韓国との歴史的な問題の背景を知らない人が多いのではないだろうか。そのため日本社会に対してそもそも今現在何が問題として問われているのか、その歴史的な背景はどこにあるのか、韓国側がどのように歴史を考えているのかなどについて日本社会に伝えていくことが自分自身の責務ではないかと考える。また研究の側面においては今後も植民地期のジェンダー史について勉強し、その研究成果を修士論文にまとめることによって学術的な側面でもまだ研究成果が多くはない分野において貢献したいと考えている。また研究だけではなくこうした問題意識は過去の問題ではなく現代にも密接する問題であると考えているため現在日本で起きているフェミニズム運動が脱帝国のフェミニズム、脱植民地主義フェミニズムとなるように自分自身も活動に参加していきたいと思う。そして研究と社会的な活動両面を通してこれまでの留学の成果、そしてこれからの学びを活かしていきたいと思う。